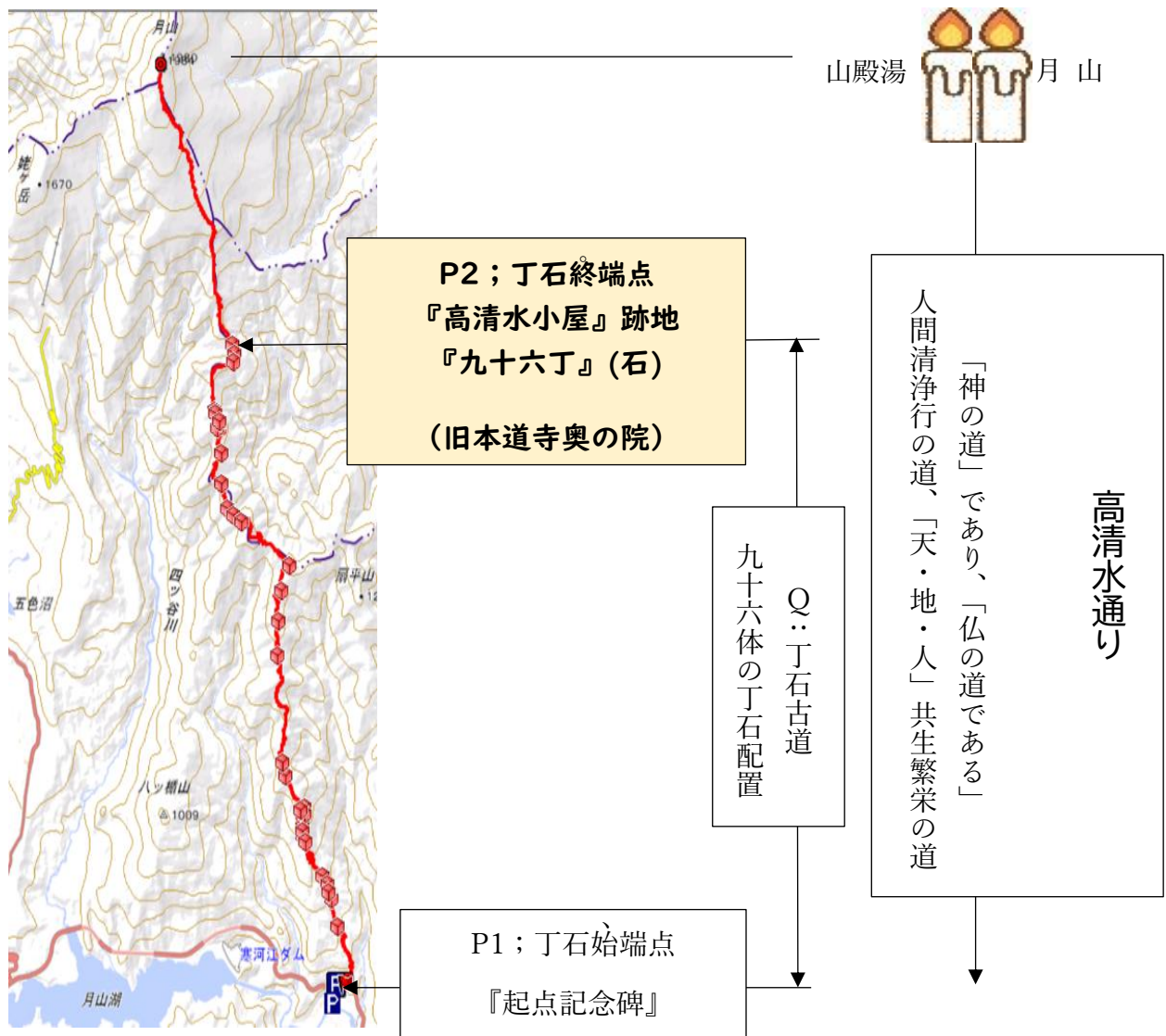


図－1において、「P2；丁石終端点」のことを取り上げる。標記の丁石を2022(令和4)年9月10(土)に発見したことから、その経緯を記録として記述するものである。



図－1

1. 重大な根拠の出現

本通りに里程標としての丁石があることは以前から広く知られる存在であった。そして、最終の一つ手前『九十五丁』（石）は道に顔を出しており、その存在は知る人ぞ知る状況にあった。しかし、下記起点記念碑を発見するまでは、本通りの所々に点在する里程標としての丁石を見て、いろいろな説——九十八丁とか百丁とか、あるいは、もっともらしい百八丁などの声があり、正確に最終何丁までであるかは不明であった。また、「高清水」という地点（名称）についても、ここ以外の場所を指す様々な見方があった。ところで、地元は何気なく九十八丁と言って来ただろうが、その数字の出処は、おそらく $49(\text{日}) \times 2 = 98$ であろうと直観する。

そんな中、2018（平成30）年11月15日（木）「大黒森プロジェクト」メンバーの布川浩久さん——河北町西里673永昌寺の副住職——が図(表)－2写真のと通りの「口之宮湯殿山神社」境内の一角に半分埋まっていた石を発見した、しかし、そのままにしておいた。何も動きは生まれなかった。

その4年後に大沼はこの石に出会った時、何か直感した。村山民俗学会員の山形市在住市村幸夫さんの協力の元、図(表)－2のとおりと同碑の刻字碑文を活字化し、文政五（1822）年に建立し

『^{これよりたかしみずまで}従是[、]高清水[、]迄^{しよ・ところ}九十六丁[、]處[、]』と刻字された起点記念碑であることを突き止め公開を図ったものである。「處」は基礎という深い意味合いを持つが、始めの基礎としてこの起点記念碑をここに置き、九十六丁先を終わりの基礎とし、そこに九十六丁(石)を置いたということを宣言したものである。

ここに頑として動かぬ重要証拠が顕現したのである。里程標としての目印丁石を、ここを起点とし（ここから始まって）「高清水」という所まで「九十六丁」あって、その間に96体の丁石を奉納安置したとする記録の碑である。『高清水』という目標地点（目的地）と『九十六丁』という数を特定しているのである。この発見は、本件ものがたりを次の一段高いステージに引き上げるトリガーになった、従来の諸説は全て否定された、退けられたのである。

しからば、『九十六丁』石はどこにあるのか、という問題意識、探查機運が高まった。関係者はそれ以来、道普請と合わせて、他の丁石や『九十六丁』石の発見・探查に鋭意努めて来た。しかし、なかなか発見に至らず悔しい思いをしつつ時が過ぎた。そんな時、挫折感を^{くじ}挫く同プロジェクトの合言葉（スローガン、旗印）の「埋もれた遺跡に光を、歴史文化遺産を後世に残そう」の思いが甦るのであった。その思いを推進力とし、希望を失わずに当日まで来ていた。



起点記念碑	
(西暦 1822 年建立)	
文政五 ^午 年	達磨寺村
里先達	不動院
山先達	長清坊
従是高清水迄九十六丁處	
七月吉日	世話人
佐藤九右衛門	佐竹傳兵衛
原田善兵衛	

高さ 66cm
幅 30cm
厚さ 20cm

図(表)－2

そうこうしている中、大沼に対して、力を鼓舞する天から押背^{おうせ}の信号が降りて来たのだ。図(表)－3のとおり「孟子」の言葉「天の^{まさ}将^こに是^{ひと}の人^{たいにん}に大任^{くだ}を降さんとするや・・・」である、“ 苦しみ苦しみ抜け、へこたれてどうするのだ、自分達が自ら立てた目標ではないのか！ ”

天の將に是の人に^{まさ}大任を^こ降さんとするや、必ずその^{ひと}心志を^{たいにん}苦しめ、その^{くだ}筋骨を^{しんし}勞せしめ、その^{たいふ}大膚を^{くうぼう}飢えしめ、その^{ふつらん}身を^{そむ}空乏にし、行ないその^{ゆえん}為す處を^{あた}払乱せしむ。心を動かし性を忍ばせ、その^{ぞうえき}能わざる處を^{ゆえん}曾益せしむる所以なり。

(その簡訳は) 天がある人物(チーム)に大任を下そうとすると場合には、まず、その人物(チーム)の精神を苦しめ、其の人物(チーム)の筋骨を疲れさせ、肉体を飢えさせ、生活を窮乏させ、その行動を所期の方向に背かせ、食い違わせるものだ。それは、その人物(チーム)の心を憤激させ、本性を耐え忍ばせて、これまで出来なかった事を埋めてさらには向上せしめるために、奮起・鍛錬をさせるものだ。

図(表)－3

2. ついに最終丁石を発見

ついに、ついに、『九十六丁』(石)を、すなわち、古来の『高清水』地点(高清水小屋跡地)を発見した。

この最終丁石「九十六丁」発見時の本年 2022 (令和 4 年) は、図(表)－2 の起点記念碑建立 1822 (文政五) 年からちょうど 200 年の節目の年であった。なお、「高清水小屋」跡については第 3 章の 2 に別記する。その発見に至る経緯を次の段に記述する。

(1) 『九十六丁』石の発見に至る二つの起点／図－4 を参照のこと

a. 2022(令和 4)年 8 月 6(土)の出来事、曇り後晴れ－12 時間行程

宮林・大沼の二人は、布施から車で送って貰い 5 時 30 分に高清水通りに入り、途中、丁石・名所・旧跡等の調査を行いながら、月山山頂經由湯殿山参籠所前大鳥居に 17 時 30 分到着した。

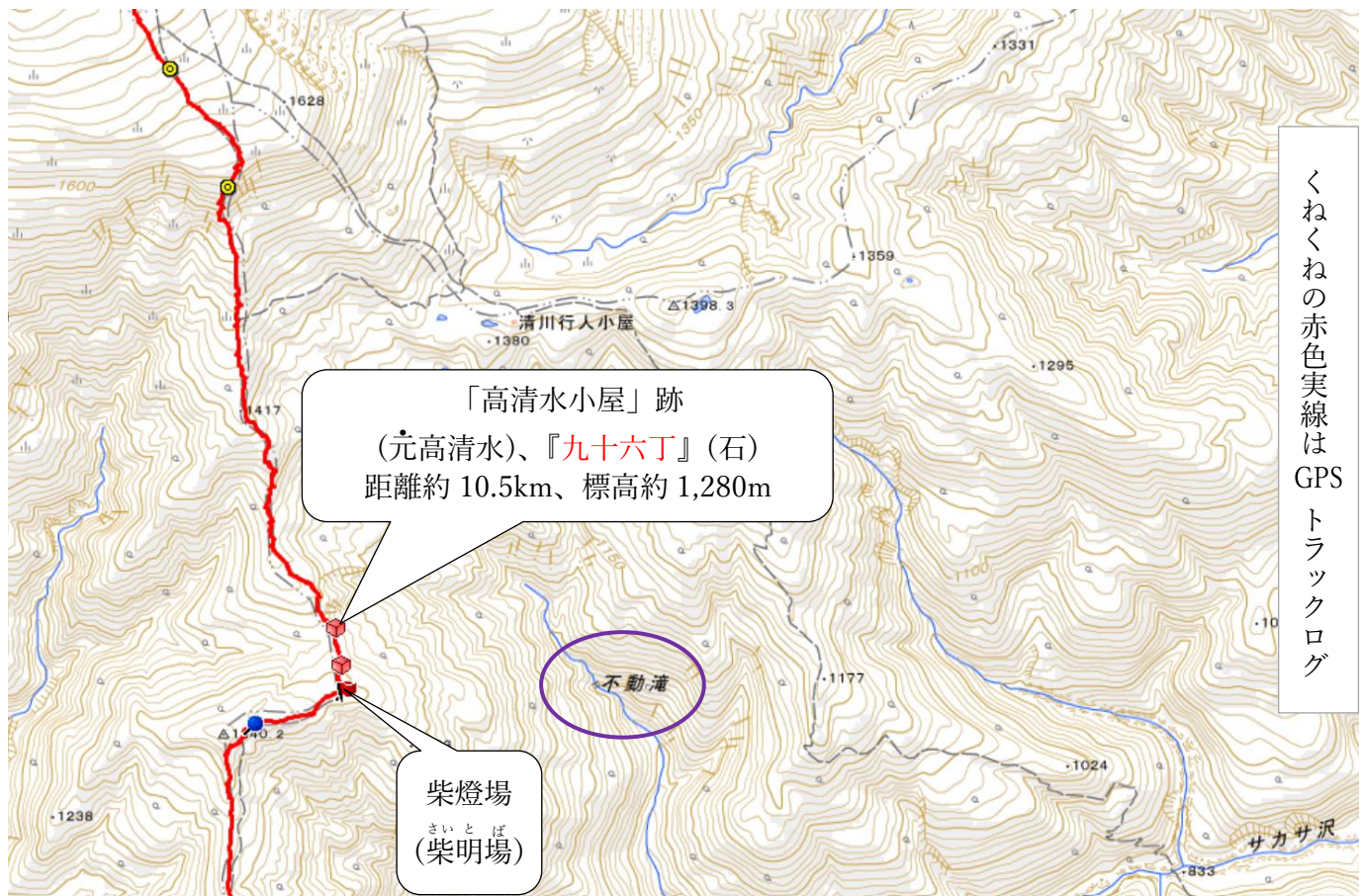
その道中、一つ手前の「九十五丁」(石)を確認し、歩幅で測量した 100m ほど先の地点は、そこから道がぐんと一段下がり傾斜地を左手に巻くようになる道筋の角に当る。宮林はその近傍に「九十六丁」(石)があるはずだとし、鎌の持ち手で突きながら探査した。他方、大沼は辺りを見回す中で、道の西側雑木林藪の中に何かの直感があった、そこに入って見た処、西側尾根を人為的に削って平坦に造成したと思われることに気付いた。

しかし、この時は「九十六丁」(石)を発見出来なかった。

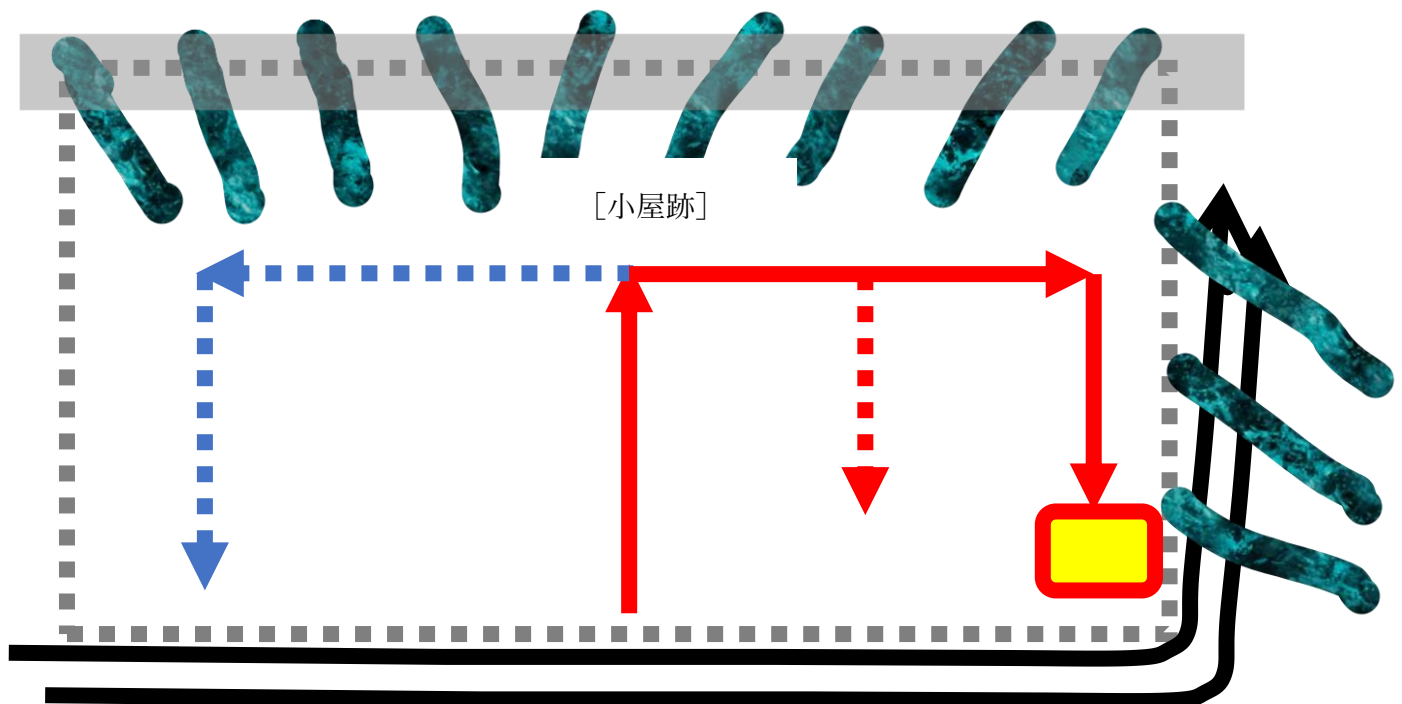
b. 2022(令和 4)年 9 月 10(土)の出来事、快晴－12 時間 30 分行程

宮林・大沼の二人は姥沢まで車で行き、7 時に姥沢口から登頂し、月山山頂經由高清水通りを下り、夫婦清水下の林道に 19 時 30 分到着した。

その道中、月山頂上を下った「大雪城」^{おおゆきじろ}の所で、「天空石 橋」^{しゃつきょう}を発見し、――これについては別記――本道寺向けに下る途中の 16 時過ぎから『九十六丁』(石)の探査に入った。少し先行していた大沼は、図－5、前回 8 月 6(土)に確認している道の西側雑木林平坦部(背丈を超える雑木と笹の藪)に入り、小尾根に突き当たったが、時間も押していたことから効率的な調査をしたく、左回りに調査するのか、右回りに調査するのか、思案した処で、前回の宮林のこの辺りという話を思い出した。



図－ 4



図－ 5

(2) 発見時の状況

a. そこで、右回りに平坦部のへりに沿って調査した。北東の角周辺に目を凝らしたら四角状の石の端（親指の先くらい）に気付いた、その気付きは直感であった。ただ一帯は雑木と根曲がり竹が絡み、落ち葉の腐葉土で埋まっていた。石の端に気付いたことから笹竹を刈り払ったらまずは墓石が顔を出した、少し広げたら丸みを帯びた石、「九十六丁」の文字に気付いた、そこでストップし、少し後方で枝払

いの道普請しながら下っていた宮林に声をかけ、合流を待って、樹木と根曲り竹の本格的な刈払いと10cm ほどは土中に埋まっていたことから土の除去を行った、そして、二人が持参していた刷毛で丁寧に・きれいに土を取り除き確認した。

ついに、ここに、「九十六丁」と刻字された石と、故人の戒名を刻した墓石二つ・台座二つを発見し、その全容を確認したのである。二人で
“やった！” 万歳、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。そして、16 時 40 分にここを離れた。

b. 図－6 a は本通り山道との相対的位置関係である。道まで濃い藪が押していた。同図 b は最初に気付いた状態の写真である、撮影のために覆っていた腐葉土と根曲がり竹だけは少し除去している。白い角は地表面に出ていたことから太陽が当たっていた証拠である。



図－6 a



図－6 b

図－7 は発見・整備直後の写真である、ライト照射で撮影したものである。「九十六丁」（石）は地上に横たえて安置したとしても、二つの墓石は、線香置き穴とロウソク竪穴からして、背後から元（下部）を雪で押され、仰向けに滑り倒れたという状態にある。『九十六丁』（石）は高さ 44cm-幅 32 cm -厚さ 11cm ほど。丁数字が明瞭に残っている。200 年の眠りから覚めた人間と対面したような不思議な気持ちになった。ただし残念なのはこれ以外何も刻されていないことである。墓石の出現（存在）は、一時期ここを住処に接待活動した証拠である、ここに小屋を掛けた証拠である。墓石の刻字（碑文）の解読は別記する。

c. 最終九十六丁（石）の発見を踏まえて、図（表）－8 中の 4 項目を節目として相互の年数間隔を整理して見た。起点記念碑の発見は、同碑設置から 196 年後だが、そこに最終『九十六丁』の『九十六』が表れた、1 は数理の基点である。“ いいですか、100 とか 108 ではないよ、96 だからね、96 丁を探せ！ “ 天に住まう『悠久の歴史』という人物からの叱咤激励、96 丁発見の前触れ・予鈴だったのである、不思議な縁を感じる。



图-7

起点記念碑建立年	明治維新	起点記念碑発見	最終九十六丁発見
文政五年	明治元年	平成 30 年	令和 4 年
西暦 1822 年	西暦 1868	西暦 2018	西暦 2022 年
200 年前	154 年前	4 年前	(基点)
46 年前	(基点)	150 年後	154 年後
(基点)	46 年後	196 年後	200 年後
図 (表) - 8			

3. 古来の『高清水』（高清水小屋跡地）地点の特定

a. 冒頭に記述した文政五年建立『従是高清水迄九十六丁處』の丁石起点記念碑において、「これより最奥の高清水の地点まで九十六丁の距離があり、その間に一丁間隔で丁石を置いた。」と記している。逆に最終『九十六丁』（石）を置いた所が『高清水』であるという。

この『九十六丁』（石）の発見・現存を決定的な根拠とし、『九十六丁』（石）の場所を古来の『高清水』の地点、すなわち、後記するが結果して「高清水小屋跡地」と特定するものである。

本通り・旧本道寺（現 口之宮湯殿山神社境内）基点にある^①文政五年建立の九十六丁（石）起点記念碑と、それを展開した^②奉納丁石の連担的（等間隔的）点在和、最終^③九十六丁（石）の三つの現存（存在要素）は、人為的な後付けの屁理屈を許さない、恣意性を入れ込む余地のない厳然たる真実を証拠付けるものである。なお、②については別記・詳述する。

これらは「高清水通り」の全容を物語る重要な生き証人的存在になったのである。

b. ところで、現在、こことは異なる場所に「高清水」と呼称する水場があり、そこに「高清水」という道標を設置しており、紛らわしいことから、今回発見したこの場所については、以後、一つの場所を指しながらも、昔に遡って捉える時は「古来の高清水」と称し、現在の視点で捉える時は「今でいう“元高清水”と称し、表現を使い分ける場合がある。

4. 正確な距離

この〔高清水〕（九十六丁地点）までは起点から GPS 測定で距離約 10,530m（標高約 1,280m）の所にあり、理論値 $109\text{m}/\text{丁} \times 96 \text{ 体} = 10,464\text{m}$ とほぼ一致する。現代の科学を使った測定と一致したのである。逆に、一丁間隔の平均は 109.7m であり、理論値（1 丁 = 109m）とこれもほぼ一致する、転げ落ちたものを上げたり、ルートは少し移動した可能性もあり、0.7m は誤差の範囲内であろう。

5. 次の新たなステージへ

✓ 1 ; 「高清水通り」は麓の本道寺集落から月山まで骨太の尾根筋一直線で伸びる歴史古道である、途中に沢・河川の渡渉やキレットは一個所もない。「文政五年建立の起点記念碑（1822 年建立）」と「九十六丁石・高清水（2022 年発見）」の地は、この古道の入口と出口（あるいは出口と入り口）に顕現した二つのランドマークである。物語に起承転結あり、と言うが、起（始）と結（終）に真に相応しい、締めにはこれ以上のない財宝である。この二つは始終一対一の対応関係にある、起点地があつての目的

地、目的地あつての起点地である。一方なくして他方はない、まさしく表裏一体の不離一如にある。すなわち、円環の訓えが垂れて来たのである、円弧上にあつて二つのものが切っても切れない糸で結び合い、間隔を取ったままに回転している様相である。その両側基点は 200 年前の当時の人達が英知を絞つて決定した處（所）である、現代の人が後付け理由で安直に移動できるものではない。

✓ 2；次頁図－9、下と上の基点に太陽と太陰の、日月二つのフラッグがまさに立ったのである、自然自立である。仏教は、その始祖と称される『釈尊（仏陀）』が生まれる遙か過去世に『日月灯明仏』という名の仏が法華經を説いたことから始まると云われている。その仏の名前は『日月』を冠するのである。さらには、弘法大師こと空海は、本通りの基点（旧）「月光山本道寺」を開山開基するに当って「月光山光明院」と命名したが、月は太陰のお月様であり、光は正真の明かりを放つ太陽のお日様であることは言うまでもない。山号「月光山」の月の光を以って月（太陰）を強調し、院号「光明院」の（正真の）光を以って日（太陽）を強調している。日（太陽）と月（太陰）を対等に扱っているのだ。頭に『月光山』である、本尊の大日如来（日）を引っ込めて、冒頭に月（太陰）を立てている、いわば日陰のものを日向に引き立てている。

思うに、日と月は「照らし、照らされ、返し、返され」の相関にある。「一つは異なる二つ、異なる二つで一つ」とする、つまり、「照らすものと照らされるものに優劣はない、境界を引かない。」とする相対(待)相即不離、陰陽二元調和を強く意識して命名したことの表れと推察出来る。

これらになぜ日月を当てたのか？だが、始めなくして終わりなし、終わりなくして始めなし、始めがあれば終わりが有り、終わりには始めが付きものである。始終は表裏一体、不離一如である。このような始終と日月に優劣はあるのか？ 無いだろう。二つは相対(待)し、同値・同相・対等価値を以って表裏一如を成す。主体と客体の関係でありながら優劣を与えない、強弱を与えない訓えである。真に縁起が良く慶事の至りである。「承・転」の処は、今の時代に生きる私達の想像力と創造性を以って、往時の人々のこの丁石に託した思いと安置に携わった人々に思いを馳せ偲び、労苦をねぎらうことにあるだろう。

✓ 3；そもそも、山道から見たこの「九十六丁・高清水小屋」跡の場所は、何の特徴もない普通の雑木林・藪の中である。その中にこのような大それたものが眠っていたとは驚愕の一言に尽きる。今日まで、多くの自称歴史家、自称学識者、史誌編纂者は、この「高清水通り」に点在する丁石を見て、様々な憶測を以って、数多の論評を加えて来たことだろう。また、今となつてはここは異なる所を高清水と指し、さも真実かのように断定する論評もあったことだろうが、前記の動かぬ証拠を以って、新たな歴史のページが拓かれたものと矜持を抱いている。

✓；最終の一つ手前『九十五丁』（石）は道に顔を出しており、その存在は知る人ぞ知る状況にあった。しかし、先輩達を含めた地元は九十六丁を発見することが叶わなかったのである。この発見は当 T-FMO 活動の大きな成果の一つと自負している。これらに何かの憶測を付け加えるなどの人為的細工のしようがない。「高清水通り」を物語る重要な生き証人的存在になったのである。

✓ 5；発見日は中秋の名月で、発見から下山途中、月が東の空にある頃は赤く染まっていた。後ろで見守っていた大日様（太陽）が花を添えて下さったように見えた。宇宙の両眼、日月からの優しい視線を感じた。

「九十六丁」（ここが『高清水』）

照らすもの（主体）と照らされるもの（客体）の塔立・並立・等立



「天・地・人」三才と交響する”五大に宿る不思議な世界“

文政五年建立起点記念碑

従是高清水迄九十六丁處

図－ 9

<end>